



寄り添うという言葉について

“寄り添う”と言う言葉は、私はほとんど使いません。抽象度が高いからです。シンポジウムを聴きながら、もし私が寄り添うを問われたら、どのように答えるのか考えてみました。もし、目の前に苦しむ人がいたならば、私たちは何をすれば、苦しむ人の力になれるのでしょうか？自分が、これが良いと勝手に思い込み、自分の良いと思うことを押しつけては、援助にはなりません。ここでは、何を目安に関わるのか？という基本的な問題から出発します。

私が、看取りという大きな苦しみを抱えた人への関わり方を伝えるときのこだわりは、専門用語を最小限にして、関わる全ての人が、「私にできることがある」と思えることです。

“私にできることがある”

“これは私にとって大切なことである”

“是非、これをやってみたい”

では、苦しむ人への援助として、目安になることは何でしょうか？

私は、顔の表情を大切にしようと伝えます。痛みがあるよりは、痛みがない方が穏やかです。希望の場所で過ごせないよりは、希望の場所で過ごせる方が穏やかです。

そばに誰も知っている人がいないよりは、そばに家族や信頼できる人がいる方が穏やかです。自分でできることをしたいのに、制限されるよりは、自分でできることを、制限されずにできると穏やかです。一般的ですが、苦しんでいる人は、自分のことを気遣ってくれる人がいると嬉しいのです。この視点で、“寄り添う”という援助の可能性が見えてきます。

数ある援助のアプローチの1つに、寄り添うがあるとすれば、その言葉の持つ得意な領域と、不得意な領域が見えてきます。苦しむ人からみて、そばで気遣ってくれる人として関わるためには、相手の苦しみに意識をあてて、寄り添うことが大切になるでしょう。

しかし、現場では、具体的に何をすると“寄り添う”ことになるのかは、個別性が高く、関わり方がわからないと、足が遠のく人がいます。関わってくれて嬉しいと感じる人に、寄り添うことは、それほど苦には感じないことでしょうか。しかし、病状を認めようとせず、怒りをあらわにする人に、寄り添うことは容易ではありません。何をすれば寄り添うことになるのか、怒りを覚えている人に寄り添い続けるためには、関わる私たちに、何が求められるのか？

苦しむ人が穏やかになれる援助を、多くの人にわかりやすく言葉にして伝えることは容易ではありません。だからこそ、抽象度の高い言葉ではなく、具体的な言葉で伝えて行く必要性を感じています。

これからの時代、地域で苦しむ人は増えていきます。医療・介護の世界だけにとどまらず、子どもから大人、高齢者まで、目の前に苦しむ人に、私たちにできることを紹介し、魅力的と感じ、そして自ら関わる事を実践してみたいと思えるような活動でありたいと願っています。

小澤竹俊

追想の集い

11月17日（土）に、めぐみ在宅クリニックで「追想の集い」が開催されました。大切な人を亡くされたご家族と共にミニコンサートを通じて、故人を思い出します。支えとなる関係は、目に見え、手で触れるだけではありません。心と心の絆がしっかりと築かれていれば、成立します。素晴らしい演奏を披露して頂きましたソプラノ麻野恵子先生、ヴァイオリン西尾ヨシ子先生、ピアノ山本緑先生、そして企画して頂きましたグリーンサポートチームの加治さん、有り難うございました。



診療実績

	2006- 2017年	2018年 1-7月	2018年 8月	2018年 9月	2018年 10月	2018年 計	総計
訪問回数	60,113	6,204	930	824	892	8,850	68,963
自宅永眠	1,985	149	22	17	27	215	2,200
施設永眠	281	40	5	7	5	57	338
在宅 (自宅+施設)	2,266	189	27	24	32	272	2,538
病院永眠	594	72	12	9	11	104	698